

光の王国 インタロード6

ふたつのこころ

インタールド6 ふたつのこころ

〜1〜

「アタシ……、高品先輩のことが好きです」

バレンタインデーの夜、初めて好きな男性に告白した。

生まれてから十四年……正確にはあと二日で。

これまでそんな機会はなかったし、そもそも告白したい相手もいなかった。

「先輩に恋人がいるのは知っています。でも、好きなんです。今日だけ……今夜だけ、アタシを、先輩の恋人にしてください」

すぐ目の前に、突然の告白に言葉を失っている高品先輩の顔があった。

高品雄二。奈子が通う空手道場の先輩。奈子の片想いの相手。

困ったような、そして少し照れたような表情をしている。

「松宮……お前、自分がなにを言ってるのかわかってんのか？」

奈子はうなずいた。

「……わかってます」

それだけ言って、大きく息を吸い込む。

何かひとこと言うたびに、深呼吸が必要だった。そのくらい緊張している。心臓が破裂しそうなほど。

「アタシって、こんな風だから……チョコレートの手作りなんてできないし、編み物なんて到底無理だし。……他に、あげられる物ないもの」

顔が真っ赤に火照っているのが、自分でもわかる。

高品先輩の顔をまともに見ることができなくて、奈子はわずかに俯いた。だから、その台詞を聞いた先輩がどんな表情をしたかはわからない。

「……本当に、いいのか？」

それは幾分トーンを落とした、やや困惑したような口調だった。

奈子はもう一度うなずいた。

「……それとも、アタシみたいな子供相手じゃその気になれませんか？」

高品先輩は間もなく大学を卒業する。明後日十  
四歳になる奈子とは八歳差。自分のことを「女」  
として見てくれるかどうか、奈子にとってそれが  
一番の問題だった。

「いや、そんなことはない……けど」

「高品先輩、大学を卒業したら東京へ行くんです  
よね」

俯いたまま、奈子は訊いた。高品先輩が小さく  
うなずく。

「ああ」

「だから、このまま、もう会えないなんてイヤ  
だったから。最後になにか、ちゃんとした証が欲  
しかったから。なにも言えないまま別れたくな  
かったんです」

声が、少し震えていた。

涙が出そうだった。

高品先輩には、以前から付き合っている恋人が  
いる。

そのことは奈子も知っている。試合の時にはよ  
く応援に来ていたし、二人はとても仲がよさそう

だった。

だから別に、奪い取ろうとか、そんなつもりは  
全くなくて。

だけど、なにも言わずにこのまま離ればなれに  
なってしまうたら……行き場のなくなったこの想  
いをどうすればいいのだろう。

この告白は奈子にとって、けじめをつけるため  
に必要な『儀式』だった。

これまでそうだった経験のない奈子にとって、  
告白することを決心するまでもずいぶんと悩ん  
だものだ。

最初は、ただチョコレートを渡すだけのつもり  
だった。

しかし相談した親友の亜依から、この『プレゼ  
ント』を入れ知恵されたのだ。奈子が一人で思い  
つくことではない。

『性格はともかく、奈子は顔もスタイルもいいん  
だし、やらせてあげるって言えば大抵の男はイチ  
コロだよ。せっかくだから、一度くらいエッチし  
ておけばいいじゃない』

亜依はそう言った。「性格はともかく……」という部分にはちよつと引つかかったが、しかし奈子も、自分が一般的な「女らしい」性格ではないことは充分に自覚している。

確かにこんな機会でもなければ、初体験なんて一生できないかも つい、そんなことを思ってしまった。

奈子も今どきの女の子、興味がないわけではないからつい、亜依の提案に乗ってしまった。

いざ告白するとなると、やっぱりすごく恥ずかしかった。

それでも言うべきことは言った。あとは、高品先輩の反応次第だ。

実際のところ、拒絶されてもいいと思っていた。それはそれで諦めがつく。

しかし、高品先輩の手は優しく奈子の肩に回された。

奈子はちらりと高品先輩の顔を見上げ、恥ずかしそうに微笑んだ。

そして、二人は並んで歩き出した。

\* \* \*

もちろん、こんな場所は初めてだった。

奏珠<sup>そうしゅ</sup>別の街外れにあるラブホテルの一室。

普段は好奇心の強い奈子だが、緊張のあまり室内の様子をゆっくり見物する余裕もない。

「シャワー、使うか？」

高品先輩が訊く。奈子は首を横に振った。

「……家で、お風呂入ってきたから」

小さな声でそれだけを言う。これももちろん亜依のアドバイス。

小さく深呼吸して、高品先輩にぎゅっと抱きついた。

恥ずかしくて、まともに顔を見られないから。

だけど、傍にいたいから。

顔を見ずに、顔を見られずに、一番近い場所にいるにはこうするしかなかった。

高品先輩は百九十センチほどもある大男だから、百六十センチの奈子が抱きつくと、ちょうど胸に

顔を埋めるような体勢になる。

部屋の壁には大きな鏡があって、顔を少し横にずらすと、二人が映っているのが見えた。

鏡に映る自分、真っ赤になって、すごく恥ずかしそう。

だけど、とても嬉しそうな、幸せそうな顔をしている。

なんだか、とても、女の子らしい表情だった。自分にこんな顔ができるなんて、思いもしなかった。

『でもさ……、エッチって、具体的にどんなふうにすればいいの？』

その問には、アドバイザーの亜依も明確な回答を返せなかった。彼女だってまだ未経験なのだ。

『そんなもん、相手に任せておけばいいじゃん。』

高品先輩は当然、経験あるんだろうから。最初は男任せでいいんだよ』

『そう……かな……』

そんな、昨日交わした亜依との会話を思い出す。

確かに亜依の言う通りだ。こんな緊張した状態で、奈子の方からなにか行動を起こせるはずもない。

「先輩……」

「ん？」

「アタシ、初めてだし……どうすればいいのかわかんないから……、先輩の好きにしてください」

「いいの、気軽にそんなこと言って。後悔しても知らないぞ」

高品先輩は、わざと冗談めかした口調で応える。つられて、奈子もかすかに口元をほころばせた。

「いいんです。覚悟はできてます」

奈子は小さくうなずく。

「朝まで、アタシは先輩のものですから」

\* \* \*

すべてが、初めての体験だった。

唇を重ねる。

ゆっくりと、時間をかけたキス。

太い腕に抱きしめられて。

ベッドに寝かされる。

高品先輩の大きな身体がのしかかってくる。

ベッドに横になって抱き合うのは、立ったままの抱擁よりもずっとドキドキする。

男の人に身体を触られること。それも初めて。

奈子に痴漢行為をはたらこうなどという命知らずは、このあたりには存在しないから。

少しずつ、服を脱がされていく。

父親と医者以外の男性の前に裸体を晒すこと。

これがいちばん恥ずかしかった。

『もしかしたら先輩、服を着せたままの方が萌えるって趣味かもしれないよ。結構そついう人、多いんだって』

どこでそんな知識を仕入れてきたのかは知らないが、亜依の言葉に従って珍しくミニスカートを

はいてきたのだが、結局それは必要なかった。

高品先輩の手で、最後の一枚が脱がされる。

すごく、緊張している。

恥ずかしくて、恥ずかしくて。

だけど、気持ちよかった。

高品先輩に触られること。

肌と肌とを触れ合わせること。

ずっとこうしていられたらいいのに。

そして、先輩が中に入ってくる。

奈子の身体の中に。

「ん……あ、……」

痛いけれど、思っていたほどじゃない。

もつとも、すごく緊張していたから痛みにまで気が回らなかつただけかもしれない。

それにこの痛みは、高品先輩と一つになった証。

初めて知った。痛みで幸せを感じることがある  
なんて。

（もしかしてアタシって……M？）

まあ、そんなことはどうでもいい。

それでもあまり激しく動かれるとやっぱり痛い  
から、先輩の身体をぎゅっと抱きしめた。

「痛い？」

「ウン……でも」

「でも？」

「……もっと……して。いっぱい、先輩のしたい  
ように、して」

先輩の身体を抱きしめたまま、奈子はささやく  
ように言った。

奈子が目を覚ますと、もう昼近くだった。

無理もない、家に帰ったのは明け方なのだ。

家に帰って、すぐベッドにもぐり込んで。

疲れているはずなのに、だけどなかなか寝付けなかった。

いつまでもいつまでも、胸がドキドキして。

ようやく眠りに落ちててもそれは浅い眠りで、いろいろと夢を見ていたような気がする。

夢といえば、昨夜の出来事すべてが夢のようにも思える。しかし、下腹部に残る鈍い痛みが証だった。

明け方にホテルを出たとき、外はまだ真っ暗だった。冬の北海道の夜明けは遅い。

高品先輩が家まで送ると言ってくれたが、それを断って一人で帰ってきた。

多分、それが正解だったと思う。

いつまでも一緒にいたら、未練が残ってしまう。それに……きこちない歩き方を見られるのも恥

ずかしかった。痛みと、まだなにか入っているような違和感のために、普通に歩けなかったのだ。

自分の家へ帰る先輩の背中を見送ってから、奈子は家路についた。

空には星が瞬いていたけれど、雪がちらちらと降っている。

二月の明け方は、普通ならば骨まで冷え切ってしまうような寒さだったけれど。

身体の奥に高品先輩の体温が残っているような気がして、凍てつく外気などまるで気にならなかった。

\* \* \*

目を覚ました奈子は、のろのろとした動作でベッドから出て、一階に下りた。

両親は例によって仕事で東京にいるから、家には奈子ひとり。朝帰りを咎める者もない。

……と思ったのは間違いだっただけだ。居間に、由維がいた。



宮本由維。近所に住む、二歳年下の幼なじみ。彼女はいつも奈子の家に入りびたっているから、合鍵を持っている。

奈子が居間に入ると、由維がこちらを振り返った。

「なんだか、怒っているような表情だった。」

「あ……」

それで、思い出した。奈子は思わず自分の口を押さえる。

昨日……二月十四日は、世間一般ではバレンタインデーだが、由維の誕生日でもある。

そして、奈子の誕生日が十六日。

二人の誕生日を兼ねたパーティをしよう、と数日前、由維がそんなことを言っていた気がする。

奈子は、今ですっかり忘れていた。

バレンタイン前は、高品先輩のことで頭が一杯だったから。

告白することと、そしてどんな風に告白するかを決めてからは、緊張で他のことにはまるで頭が回らなかつたから。

一番仲のいい由維のことすら、すっかり失念していた。

「どこ、行ってたんですか？」

拗ねたような声で由維が訊く。

「あ……いや……あの……ちょっと、ね……」

奈子はしどろもどろに應える。本当のことを言えるわけがない。まだ小学六年生の女の子には刺激が強すぎる。

ソファから立ち上がった由維は、いきなり奈子に抱きついてきた。

その目に涙が滲んでいた。

力いっぱい、奈子にしがみついている。

小柄で華奢な由維は、奈子の肩くらいまでしかない。比率でいえば、高品先輩と奈子の身長差と同じくらいだろうか。

そのせいか、由維の姿が昨夜の自分と重なって見えた。

ホテルの一室で、先輩に抱きついていた自分とそっくりだ。

(この子……)

本気で、奈子のことが好きなのかもしれない。  
ふと、そう感じた。

時折、友達以上の感情を示す由維を、これまで  
は冗談半分だと思っていたけれど。

違ったのかもしれない。

もちろん、奈子には同性愛の趣味はない。

しかしたからといって、他人のそういう趣味に  
嫌悪感を抱いたりはしない。

恋愛感情なんて、人それぞれだ。

何が正しいとか、間違っているとか、そういう  
ものじゃない。

同性を好きになること。

他に恋人がいる相手を好きになること。

ぜんぜん違うように見えるが、根本的なところ  
でつながっている。

祝福されない、障害のある恋愛という点では同  
じかもしれない。

奈子は、由維の頭をそつと撫でた。

茶色っぽい由維の髪は、柔らかな猫っ毛だ。

「ゴメン、由維……」

頭を撫でながら言った。

「その……今夜、じゃダメかなあ？ パー

ティ……」

しばらく間をおいて、由維が小さくうなずいた。

（そんなこともあったっけなあ……。もう二年か……）

奈子は、もの思いにふけっている。

「なに、ぼんやりしてるんです？」

「え？」

由維の声で、ふと我に返った。

目の前に、大きなチョコレートケーキが置かれている。由維のお手製のケーキ。

由維は昔からお菓子作りとか得意だったけれど、二年前のあの日よりもずっと上達している。

ケーキの横に、甘口の白ワインの瓶。

去年と同じく、今年もバレンタインの夜は二人でパーティだ。

「なに、ぼんやりしてたんですか？」

ソムリエナイフでワインのコルクを抜きながら、由維がもう一度訊く。

「えっと……いや、別に」

奈子は曖昧に誤魔化す。

「高品先輩のこと、考えてたんでしょ？」

「ど、ど……どしてっ？」

ワインの注がれたグラスに伸ばしかけた手が、一瞬止まる。由維がグラスを取って渡してくれた。

奈子のグラスと由維のグラス、二つが軽く触れあつて、チン……と澄んだ音がする。

金色がかつたトロリと甘い液体が唇を濡らす。

「前に言ったじゃないですか。奈子先輩は、考えることがすぐ顔に出るって」

澄んだグラスを通して、由維がジト目で見ている。

「二年前のバレンタインのこと、考えてたんでしょ？」

「そ、それと高品先輩となんの関係がっ？」

口ではそう言っても、グラスを持った手が震えている。奈子は残ったワインを喉に流し込んだ。

二年前のあの夜のこと、そして奈子のロストバージンの相手が高品先輩だということ、由維には話していないのに。

「だって、考えたら他にいないじゃないですか」

由維があっさりとタネを明かす。

「で、亜依さんを問いつめたら教えてくれたもの」

「あ、亜依いー、あの裏切り者！」

「亜依さんを責めるのはどうかと思うけど」

由維はそう言うと、奈子のグラスにお代わりを注ぐ。

確かに悪いのは奈子で、別に亜依の責任ではない。とはいえこんな状況では、八つ当たりのひとつもしたくなるのが人情だ。

ヤケ酒気味に、ワインを喉に流し込む。

そんな奈子を見ながら、由維がつぶやいた。

「悔しいなあ」

「なにが？」

「もっと早くに気付いていれば、高品先輩より先に奈子先輩のバージン奪ったのに」

けるつとした表情で、とんでもないことを言う。思わず飲んでいたワインを吹き出しそうになった。

「なに言ってるの！ あんた、その頃まだ小学生じゃん！」

「別に、歳なんて関係ないと思いますけど？」

「大アリだつて！ ……つて、そーいえば……」

グラスをテーブルに置いて、奈子が何かを考えている。

どちらかといえば、悪巧みをしているような顔だ。

「由維……今日で十四歳だよな？」

「そーですよ？」

「つまり……」

にやりと、下心ありありの笑みを浮かべて奈子は言った。その笑顔に、由維は殺気を感じる。

「二年前のアタシと、同い年になったわけだ」

「そ、それがなにかっ？」

応えながら、由維は既に逃げ腰だった。しかし一瞬遅く、奈子に抱きつかれてソファに押し倒されてしまう。

「由維もそろそろ、初体験してみない？」

奈子は耳元に口を寄せてささやいた。

その手が、由維のスカートの中にすべり込む。

「だ、ダメ！ 私はまだ早過ぎるもん！」

由維は慌ててその手を押さえる。

「あんた自分で、歳なんて関係ないって言ったじゃん」

「それとこれとは別！ 私は関係あるんだもん！」

必死に抵抗する由維だが、腕力で奈子にかなうはずがない。しかも今の奈子は、アルコールの影響でリミッターが外れている。まったく手加減ができない状態だ。

「怖がらないで。優しくしてあげるから」

「ダメ、とにかく今日はダメッ！」

「どーしてよ？ 最高の日じゃない」

今日はバレンタイン。外は雪も降っていて、ムードは最高。

しかも由維の誕生日でもあるのだ。これ以上のシチュエーションなどあるまい。

しかし由維は、無言で居間の大きな窓を指差した。

奈子も、そちらへ視線を向ける。

「……………え？」

窓の外にある、カメラのレンズと見つめ合う形になった。

正確に言えば、ハンディタイプのビデオカメラだ。

そして、それを構えているのは

亜依、だった。

降りしきる雪の下、真っ白に、雪だるまのような姿になった亜依が窓の外にいた。

「……………」

「……………」

「……………」

時間が止まったかのように、三十秒ほど無言の時間が過ぎた。

「あ、あ、あ、亜依いーつつつつつ！」

ようやく我に返った奈子が、凍りついた窓を力づくで開ける。

「あははー、見つかつちゃった。いいところだったのに」

身体に積もった雪をぱたぱたと払い落としながら、

亜依は無邪気に笑った。

「な、なにやってんのよ、そんなところで！」

「今夜ここに来れば、いいものが見れると思って。次の校内新聞で、一面トップを飾る予定だったのに」

亜依は学校で、新聞部に入っている。放課後はよく、記事のネタを捜して、カメラを手に校内を歩き回っていた。

「……そんなことのために？」

奈子の肩から、がっくりと力が抜ける。

「それに、こうでもしないと最近私の出番少ないし」

「なんの話よ」

「あと、これ」

亜依はコートのポケットから、小さな包みを取り出した。

きれいな包装紙に包まれ、紅いリボンが結ばれた四角い包み。

中身は訊くまでもない。バレンタインのチョコレートに決まっている。

亜依に付き合っている彼氏がいた頃から、奈子

は毎年チョコをもらっていた。

そういえば今日は、学校では亜依からチョコをもらっていないかったつけ。

呆れ顔でチョコを受け取りながら、奈子はため息をついた。

「……もういいや。寒いでしょ、上がりなよ」

亜依はわざわざ玄関に回ることもせず、そのまま居間へ入ってくる。脱いだコートを受け取った由維がそれをハンガーに掛けている間に、奈子はグラスを持ってきて、亜依にもワインを注いでやった。

「あ……」

戻ってきた由維が、小さく声を上げる。

「なに？」

「その……」

由維は困ったような顔で、小声で応えた。

「亜依さんに、あまり飲ませちゃダメですよ。酒グセ悪いですから」

「酒グセって……、どんな風に？」

「近くの子を襲うクセがあるんですよ」

「え？」

奈子は、亜依を振り返った。亜依はなぜか、引きつった笑みを浮かべている。

それを見て、もう一度由維に向き直った。

「由維は、なぜそれを知ってる？」

「え？ えっとお……」

由維はとぼけて、あさっての方を向く。

奈子はもう一度亜依を見る。

「いや……その……」

「亜依い……まさか……」

「いや、あの……軽い冗談というか、酔った勢いというか……」

ゆらり。

不気味なオーラを漂わせて、奈子が立ち上がった。

目が据わっている。

「あ、あのね奈子。落ちついて話し合おう？」

ね？」

「話し合う……？ いまさらなにを？」

奈子の瞳の奥の危険な光に気付いた亜依は、脱

兎のごとく逃げ出した。

しかし、奈子の反射神経を凌駕できるはずもない。たちまち捕まって、絨毯の上に押し倒された。

「ち、ちよつと奈子！」

「アタシの由維に手を出して、ただで逃げられると思ってる？」

奈子は、低い声で言った。

「ちよつと奈子、あんた目がマジだよ！ もう

酔ってるつしょ！」

「うるさい！ 由維に手を出した代償、身体で払ってもらおうじゃない？」

有無を言わず、服の胸元に手をかける。ポタンがいくつかはじけ飛んだ。

露わになった胸元に、奈子の手が差し入れられる。

「亜依ってば、ずいぶん胸大きくなったじゃん？」

「やあつ！ だめえ！ こーゆーのは二人きりの時に……じゃなくて！」

そんな二人の横では、頬を赤らめた由維が、興

味津々にビデオカメラを回していた。



あとがき

毎年恒例のバレンタインスペシャル、今年は『光の王国』です。でもこの後『みそさざい』と『月羽根』も書く予定。間に合うのか……？

で、今回のインタルードは、これまで本編の中で断片的に語られてきた、奈子の『初体験』のお話。こうして見ると、悪いのはすべて亜依か？

でも結果論でいえば、奈子が「向こう」へ行つた時、経験済みでよかったですよ。そうじゃない、初めでの相手がエイシスに……（笑）。しかも初めてなのに一晩五回！（爆）

だけど、明け方まで一緒にいたってことは、高品とも一回だけってことはなさそうですね。こうして見るとおいしい役どころだなあ、高品。エイシスと違って痛い目を見ることもないし。

さて、読者の皆さんもそろそろ本編の続きが待ち遠しくなっているころではないかと思えます

が……。

ごめんなさい。執筆再開はもう少し先です。

この後、本編第一話の書き直し版を仕上げて、それから某新人賞応募作品と平行して、番外編『紅の花嫁(仮)』を書いて……第八話『レーナの御子』はその後ですね。

こんな調子で、今年中に第九話『黒剣の王』まで公開できるのでしょうか。「本編は年に二話のペース」という公約を守れるかどうか、ちょっと不安です。

それでは、次回作でまたお会いしましょう。

二 年二月 北原樹恒

[kitsune@mb.infoweb.ne.jp](mailto:kitsune@mb.infoweb.ne.jp)

創作館ふれ・ちせ

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kannychep/chiron/>

## 閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

### モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

### 印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。